

平成28年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）
（総括）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発（28020201）

研究代表者 木下 博之 香川大学医学部 教授

研究要旨

本研究では、標準的な記載例集を作成し、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載するための教育コンテンツの開発と普及・啓発を目的とする。

本年度は、実際の事例をベースとした模擬事例を設定し、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）とあわせて不適切な記載例およびその解説を作成した。医師の自学自習に活用できるよう、e-ラーニングのシステム構築も併せてすすめた。

次年度は、本年度に作成した事例集を用いて、その教育効果の検証を行う。

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

池松 和哉・長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・法医学分野 教授

横田順一郎・独立行政法人 堺市立病院機構 副理事長

加藤 稲子・三重大学大学院周産期発達障害予防学講座・小児科学 教授

鷺見 幸彦・国立長寿医療研究センター・神経内科 副院長

横井 英人・香川大学医学部附属病院・医療情報部 教授

宮武 伸行・香川大学医学部人間社会環境医学講座・衛生学 准教授

A．研究目的

本研究は、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載するために、標準的な記載例を作成し、その普及・啓発のための教育コンテンツの開発を目的とする。

B．研究方法

研究開発の内容は大きく、事例と標準的記載例を中心とするコンテンツの作成と、作成したコンテンツを用いた教育効果について、特に現場の医師を対象として評価を行う。研究初年度の本年度は 標準的記載例の作成

を中心に行う。

各分担研究者、研究協力者の過去の経験、学会や検討会、カンファレンスなどで伝聞した情報も含め、それぞれの専門領域における比較的典型的な事例を収集し、問題となる点や課題、あるいは死亡診断書・死体検案書の記載が困難な点を抽出した。それらの問題点や課題を基に、学習用の事例を作成し、ICD-10の原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）を作成する。あわせて不適切な記載例およびその解説も作成した。またそれらの記載例については、研究班員全員でのブラッシュアップを行い、様式の統一を図った。

（倫理面への配慮）

事例集の作成に際しては、研究代表者、研究分担者の過去の経験も参考にすが、個人情報や個人が特定できるような内容は含まない。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例、あるいは記載方法の判断に迷うと考えられる各領域（外因死、小児医療、高齢者医療、救急医療等）での事例について、20例の事例を設定し、それぞれについて不適切な記載例と模範記載例（標準的記載例）、さらにそれらの解説を作成し、現在、それらの事例集の内容の充実と、事例集

を基礎としたe-ラーニングのシステム構築について検討を行っている。

D．考察

死亡診断書、死体検案書は人間の死亡を医学的・法律的に証明することのみならず、わが国の死因統計を作成する際の資料となる。死因統計の基礎となるのが死亡診断書・死体検案書の記載内容であり、死因欄に記載された傷病から死因選択ルールにより原死因を選び、死因が分類される。

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会経済的に広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。そのため、医師は死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、現状の重要性についての意識・認識は必ずしも十分ではない。

本研究ではまず事例集を中心とした教育コンテンツを作成した。この評価については次年度に行う予定であるが、これを活用することで適切な記載に関する知識を普及させるとともに、適切な原死因選択を行うことの重要性も啓発していく。これらの活動を通じて、原死因選択方法についての周知と記入に関する意識の向上が、直接的・間接的に死因の精度向上につながるものと考えられる。さらには死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

E．結論

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例、あるいは記載方法の判断に迷うと考えられる例について、実際の事例に基づく課題を設定し、それぞれについて不適切な記載例と模範記載例（標準的記載例）、さらにそれらの解説を作成した。これら本研究の成果は、死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

F．健康危険情報

該当なし。

G．研究発表

1. 論文発表

Tanaka N, Takakura A, Jamal M, Kumihashi M, Ito A, Ishimoto S, Tsutsui K, Kimura S, Ameno K, Kinoshita H. Stomach gas as a useful matrix for detecting ante-mortem gas exposure. A case of asphyxia by helium inhalation. Rom J Leg Med. 2016; 24: 21-22.
Tanaka N, Takakura A, Jamal M, Kumihashi M, Ito A, Tsutsui K, Kimura S, Ameno K, Kinoshita H. Detection of kerosene in stomach contents - useful indicator of vital reaction. Rom J Leg Med. 2016; 24: 128-130.

Kinoshita H, Tanaka N, Takakura A, Kumihashi M, Jamal M, Ito A, Kimura S, Tsutsui K, Nagasaki Y, Mastubara S, Ameno K. Detection of butane metabolites as an indicator of butane abuse. Rom J Leg Med. 2016; 24: 216-218.

横田順一朗：特殊な受傷機転．JPTECガイドブック．へるす出版、東京；178-183，2016

横田順一朗（編集委員長）：外傷初期診療ガイドラインJATEC改訂第5版、へるす出版、東京、2016

2. 学会発表

宮武伸行、木下博之．窒息死の季節性、気温との関連．平成28年度香川県医学会，2016年11月3日，高松市．香川国際会議場

木下博之．Aiについて．平成28年度香川県医学会，2016年11月3日，高松市．香川国際会議場

池松和哉．死亡診断書・死体検案書の作成に関する留意点．長崎県医師会・警察活動に協力する医師の部会第1回研修会，2016年11月5日，長崎市，長崎県医師会館

谷川原 綾子，辻 真太郎，福田 晋久，西本 尚樹，小笠原 克彦，横井 英人．医療機器不具合用語集のハンドリングツール構築に向けた同義語候補の同定に関する検討．第20回日本医療情報学会春季学術大会，2016年6月4日，島根県松江市

谷川原 綾子，西本 尚樹，辻 真太郎，福田 晋久，谷川 琢海，上杉 正人，小笠原 克彦，横井 英人．医療機器不具合用語集に

おける同義語抽出に向けた異義語除外法の検討．第36回医療情報学連合大会，2016年11月23日，神奈川県横浜市

小野 大樹，横井 英人，中園 美香．医療機器等における不具合等報告の「健康被害・不具合状況」から「回収（改修）」につながる事象推定の試み．第36回医療情報学連合大会，2016年11月24日，神奈川県横浜市

